

特別寄稿

山形と内田洋行を結ぶ最上川と新川

株式会社内田洋行 代表取締役社長
大久保 昇

私にとって山形は、以前はなかなかご縁がなく少し遠い存在に思っておりました。それが大きく変わったのは山寺の観光に来た時でした。

名所の山寺は登りがきつく、下山後、休憩のために麓の資料館に入りました。そこで流れていた映像が最上川と松尾芭蕉の紹介のビデオです。「五月雨をあつめて早し最上川」。最上川は米沢の奥から県内をぐるりと回り酒田に注ぎます。山寺のもっとも奥の山からも産物を集め、日本海の酒田まで船で素早く送れます。樽廻船で遠く大阪まで荷を運び、さらに京へ、また江戸に荷を運ぶ。そこにロマンを感じ、大阪出身の私にとっての山形が急に身近になりました。

内田洋行の本社は、東京駅近くの八丁堀、東京都中央区の新川にあります。新川には江戸初期に幕府を支えた豪商、河村瑞賢が居を構えていました。実は、その瑞賢こそ、最上川の水運を利用して江戸に荷を届ける、西廻海運を確立した人であると、最近になって知りました。

さて話を明治に進めましょう。山形大学工学部の前身である米沢高等工業学校が創立されたのは明治43年1910年。素晴らしい本館が米沢で重要文化財として残っています。実は、内田洋行も同じ1910年に中国大連で創業をしました。

特に製図機は主力製品とされ、「ケント」製図機のブランドは設計者必須の道具として戦後は中学校の技術科や工業高校の教材にもなり、昭和50年代には工場を山形に新



創業時の内田洋行大連支店

設をしています。そして大正から昭和にかけてのヒット製品が「ヘンミ式計算尺」です。国内のシェアは60%を超えたとされます。戦後、中国から撤退をした内田洋行は、日本の復興には科学教育振興が必須とし、学校に計算尺などを提供する科

学教材部を設立、その後は理科実験器具や教育機器を提供する大きな部門に育っていきます。

計算尺はその後、電子計算機（のちにコンピュータ）へとその性能を進化させ、昭和38年（1962）内田洋行は超小型電子計算機の製造販売に入り、企業や役所に販売。そして学校でのコンピュータ教育用の制御装置を30年以上前に開発製造したのは山形の地でした。

さて、2020年に予定される次期学習指導要領は、生徒の主体的な学びを引き出すアクティブラーニングが学習方法として考えられています。内田洋行は、その研究や体験のため、2011年に新川本社に未来の学習空間「Future Class Room®」を企画開発し、設置しました。

生徒一人一人の主体的な学習活動が中心となるアクティブラーニングでは、タブレット等のICT機器は、道具としてあるのが自然なものになることでしょうか。理科や教科の教材に触れながら課題やアイデアを生徒が発見し、ICTを使いこなしてまとめていく。そんな子供たちの力をひきだす教育の支援になればと考えています。山形と内田洋行のある新川のつながりが、江戸、明治から平成をへて、教育を軸としてさらに大きく開花することを祈念しております。



新川にある本社概観

